

## 平塚柔道物語 59

## 全国制覇

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

平成25年の夏、浜岳中学校女子柔道チーム（平塚柔道協会会員）は、神奈川県での全国大会県予選で、強敵の相原中学校を1対0で破り、優勝、全国大会に出場した。浜岳中での練習と平塚柔道協会での夜の練習、その後のトレーニングなど、日本一とも言える厳しい練習に耐えて、この日を迎えた。古都愛海・渡邊聖子・野島楓、そして主将の児玉天海の各選手は、全国大会の中でもひとときわ輝いていた。結果は第5位であったが、準々決勝では、各選手、自分の体重よりも30kgは重い選手に善戦し、心も体もたくましく成長した彼女たちの健闘を私は心より称えたい。そして、この成果は平塚柔道の輝く歴史の1ページとなったのである。

さらに、うれしかったのは、40kg級個人戦で五十嵐莉子選手が全国で優勝したことである。平塚柔道の歴史を振り返ると、これまでの最高は全中第2位の升水翔兵・佐俣優依・五十嵐真子（莉子の姉）の3選手であった。この記録を破ったのである。

今回の女子個人戦に、五十嵐選手の他、48kg級で出場した新倉舞音選手は、1回戦、見事に1本勝ちをしたものの2回戦で敗退。関東大会で準優勝した児玉天海選手も2回戦、3位の選手に善戦するも判定で負けてしまった。全国はまさに強敵ぞろい。上位に食い込むことはできなかった。そのような中で五十嵐選手は2回戦から出場。初めは、袈裟固めの1本勝ち、3回戦は合わせ技。準々決勝では、指導2つで勝つ。続く準決勝では、僅か51秒で上四方固めの1本勝ちで見事な勝利をおさめた。続く決勝の相手は、九州チャンピオンの辻田選手である。これに勝てば優勝、全国制覇である。彼女は胸の高鳴りを覚え、大きな皆の声援が聞こえなくなるくらいに、集中力が出来たと後で語っている。自分よりも1回り大きい相手は、やはり強かった。背負い投げ、大内刈り、小内刈りと自分の得意技を連発したが、掛からずに3分の時間切れ、勝負つかずの1分半の延長戦となった。すべてが、この1分半にかかっている。様々な思いが彼女の脳裏を駆け巡る。「姉の昨年の敗退、自分の関東大会決勝での負けなど」それを打ち消すかのように、自分の心に何回も言

い聞かせたのは「絶対に勝つ」という言葉であった。彼女は得意の足技を連発、攻めて、攻めて、攻め抜いた。惜しいところも幾つかあった。時間切れ、判定の旗は3本。3対0で五十嵐選手の判定勝ちとなった。浜岳中の仲間たちの換声がかえり、「私は勝ったのだ」という実感が湧いた。大きな涙が頬を伝わる。「お父さん、お母さんありがとうございます。千葉先生、柏木先生ありがとうございます。仲間のみんなありがとうございます」そして仕事の都合で平塚市と大会会場の三重県伊勢市を2回も往復して駆けつけてくれた柔道指導者の真田先生の顔が目に映った。「莉子よくやったな」という先生の目に涙が光っているように見えた。余談ではあるが、真田は教師になって17年目にして、初めて全中チャンピオンを出す夢がかなったという。そして県大会で、48kg級、44kg級、40kg級の3階級制覇をした莉子なら、必ず全国制覇ができると信じていたという。また五十嵐選手のこと。父に聞いた話であるが、小学校6年生の時に、国語の時間に書いた「全国制覇」の書を部屋に飾り、常に目標を忘れぬ努力をしていたという。

ふだんは、おとなしく、物静かな笑顔、初めて会った人は、誰もが柔道をやっているとは見えない。そんな彼女は柔道着を着たら別人になる。試合にのぞむと阿修羅の如く変身し、次から次へと技が出てくる。そんな彼女の強さの秘訣について、部活担当の千葉教師は「集中力」であるという。「練習の時は練習に、試合の時は試合に、授業の時は授業に集中する」彼女の良さはここにあると力説する。勉強もできる彼女は、授業中、先生の話の吸い取るように聞いているという。まだ、中学2年生である。次への飛躍を大いに期待したい。



落合平塚市長をはさみ、優勝した五十嵐さん(右から3人目)と全国大会出場チームのメンバー